
太陽と灰

東堂 燦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽と灰

【Zコード】

Z6896V

【作者名】

東堂 燦

【あらすじ】

宫廷薬師であるイーディスは、ある日、女王陛下から第五王子ライナスの傍仕えを命じられる。一年前に一方的に縁を切られたライナスとの再会に、イーディスの心は揺れ始める。
*サイト『羊の瞳』
<http://snowsheep.sakura.ne.jp/>
から転載しています。

prologue (前書き)

第一回ルルルカップ落選作品を改稿したものです。

宫廷薬師であるイーディスが女王に呼び出されたのは、ある毎下
がりのことだつた。

「おせち
面をあげよ」

イーディスは伏せていた顔をあげて、玉座に座る年配の女を見上げた。ガレン国を統べる女王は、艶やかな笑みを浮かべている。「久しいな、イーディス・ティセ・ディオル。貴殿が王立学院に入学した時以来になるか？」

「はい。……、お久しぶりです、陛下」

「貴殿の評判は良く聞くよ。薬師として優秀だと、貴殿を学院に推薦した私としても嬉しい限りだな」

「いえ。未だ薬師として至らぬ身です」

「ふふ、謙遜は要らないよ。貴殿の実力と才能は私も認めているからな。……、そこで、だ。この度、貴殿の働きを評価し異動を命じたい」
イーディスは息を呑んだ。女王が自ら当事者を呼び出し、異動を命じることなどあり得ない。戸惑いを隠せず瞳を揺らしたイーディスに、女王は紅を刷いた唇を釣り上げた。

「貴殿を、ライナス・レト・エレン・シルファ・ガレン。第五王子の傍仕えに任命する。彼の王子が成人を迎えるまでの短い間だが、宜しく頼むぞ」

ライナス・レト・エレン・シルファ・ガレン。その名を聞いて、イーディスは肩を震わせた。

「嬉しいだろう？　かつての級友、この一年間会つことも叶わなかつた第五王子の傍に舞い戻れるのだから」

「……何を、お考えなのですか」

思わず零れ落ちた言葉に、女王は目を細めた。

「不満があるのか？ 灰の民よ」

有無を言わさぬ口調に、イーディスは視線を下げる。疑問は多々あるものの、女王からの命を断ることなどできない。

「よろしい。一心なく我が息子に仕えよ」

震える手を握りしめて、イーディスは女王の前を辞した。

清々しい朝の空気が頬を撫ぜた。

富廷薬師の服に身を包み、イーディスは第五王子ライナスが住まう離宮を目指して歩いていた。

周囲を見渡せば、女官や庭師などが既に仕事を始めている。それは、いつもと変わらぬ光景だったが、イーディスの心は穏やかではなかつた。

今日から、ひたすらに薬を精製していた昨日までの日々とは違うのだ。

渡り廊下に出ると、長く伸ばした赤い髪が朝風になびく。風に舞う髪を抑えつけながら、イーディスはその毛先に視線を遣る。灼熱のような赤い髪は、昔と異なり、毛先が灰色に染まっていた。

かつて、この赤を好きだと言ってくれた人がいた。この髪に穢い灰色が混じつていなかつた頃の話だ。

「……、ライナス」

ライナス・レト・エレン・シルファ・ガレン。現女王と、十数年前に亡くなつた伯爵との間に生まれた第五王子だ。

彼との出逢いは、遡ること六年前、王立学院に入学した日だつた。イーディスが十歳、ライナスが十三歳の時である。

同じ級に所属し隣の席になつたことが、ライナスとの最初の記憶だ。それから、王立学院を卒業する日に彼から縁を切られるまで、イーディスはいつもライナスの傍にいた。

「何の用だ」

鋭い声に、過去を追慕していたイーディスは現実に引き戻される。いつの間にか第五王子の離宮の入り口に辿りついていたらしい。扉の前に立つていた青年騎士が、イーディスを睨みつけていた。

「……、あいかわらず愛想がないのね。スタン」

彼は、ライナスの護衛として学院に在籍していた者だ。当時のイ

イーディスの級友でもある。

昔と何一つ変わらない仏頂面の彼に苦笑してから、イーディスは異動の旨が書かれた書面を見せた。

「陛下の命よ。通してくれるでしょう?」

「……、勝手にしろ」

スタンは眉をひそめながらも、イーディスを通しててくれた。離宮へと入り、イーディスは、あらかじめ説明されていた部屋の前で足を止める。

「イーディス・ティセ・ディオル、ただいま参りました」

早鐘を打ち始めた鼓動に気づかないふりをして、イーディスは扉を開けた。

「いらっしゃい。会いたかったよ、イーディス」

柔らかな声が耳朶^{じだ}に響く。

太陽のように煌めく金の髪に、同色の瞳。褐色の肌をした美しい青年は、イーディスを笑顔で迎えた。

「……、お久しぶりです。ライナス・レト・エレン・シルファ・ガレン殿下」

イーディスは、わずかに震える声で彼に応えてから、顔を俯かせた。覚悟して来たつもりだったが、やはり、彼を前にすると萎縮してしまう。

「嫌だな、堅苦しい言葉遣いは止めてよ。昔のように話してほしい」ライナスの言葉に、イーディスはゆっくりと顔をあげる。

昔の少年らしい幼さはなくなり、彼は立派な青年へと成長を遂げていた。イーディスが彼から一方的に縁を切られ、一年もの月日が流れることを実感させられる。

「いえ、……私のような灰の民が、貴方様に生意気な口を利くわけにはいきません。昔のことは、忘れてください」

早口で言い切ったイーディスに、ライナスはわずかに顔をしかめ

る。

「……、そう、それなら、命令するよ。君にそんな態度をとられるのは不愉快だからね」

この場から逃げ出したい衝動を抑え込み、イーディスは強く拳を握る。宫廷薬師であるイーディスに、女王の命を拒否することはできない。来月に彼が成人を迎えるまで、イーディスは傍仕えの役目を全うするだけだ。

小さく息を吸つてから、イーディスは唇を開いた。

「……、一年ぶりね、ライナス」

口にした言葉が震えていることに気づき、情けない自分に対しての怒りが湧いてくる。

「ああ、……王立学院を卒業してから、もう一年も経つんだね。懐かしいな、せつかだから、思い出話でもする？」

嬉しそうに問うてくるライナスに、イーディスは唇を噛んだ。

「貴方と話すような思い出なんて、何処にもないわ」

「……やっぱり、怒っているの？ 王立学院の卒業の日、君を呼び出しておいて、約束を守らなかつたこと」

分かつていてるのならば、わざわざ聞かないでほしかつた。イーディスは、苛立ちを隠そともせずにライナスを睨みつけた。イーディスの態度に、ライナスは肩を竦める。

「昔は随分と慕つてくれていたのに、嫌われちゃつたみたいだね」

「……っ、それだけのことをした自覚はあるでしょう」

「そうだね。君の期待と気持ちを裏切ったのは、僕だから」

悪びれる様子もなく、彼は優しそうに見える笑みを湛えたままに言つた。イーディスに対し悪いことをしたとは、微塵も思つていないのだろう。

「でも、嬉しいな。僕のこと嫌いになつたみたいなのに、傍仕えの話は受けてくれたんだね」

「陛下の命令よ、断れるはずがないでしょう。……本当に、陛下は何をお考えなの？ 貴方の傍仕えになりたい人なんて、私以外でた

くさんいるはずよ」

ライナスは、性根こそ曲がっているもののガレン国第五王子であり、成人を迎えるには伯爵であった父親の領地を継ぐことになつて、その上、王立学院を卒業後は、魔力を研究する学者として、それなりの地位を持つていた。彼の元で働きたいと願う者は数多くいるはずだ。

「君たち灰の民でなくては、意味がないよ」

「……、私たち灰の民にしか、薬が作れないから？」

ライナスは頷いた。

「君たち灰の民は、この国で唯一薬を作れる特別な存在だからね。母上もそろそろ良いお歳になるのに、次の王位継承者は発表されない。僕も来月には成人だし、誰かが莫迦なことを考えて僕を害す可能性は十分ある」

ライナスの言葉は、的外れではない。

第五王子ライナスは、女王の気に入りだ。

ライナスの父親は、唯一、女王自らが選んだ夫だ。他の夫は臣下からの薦めで婚姻を結んだ者たちだが、ライナスの父親である伯爵は、女王が愛し傍に置いた男だった。

だからこそ、女王は今は亡き彼との息子であるライナスを特に可愛がっていた。ライナスが幼い頃から、甘やかして好き勝手させていたことは宮廷では周知の事実だ。

女王のライナスへの愛情の深さは、傍目から容易く見てとれる。ライナスが次の王になるのではないかと臣下の間では昔から言われているものだつた。

「母上に**蠶壳**ひじきされている自覚はあるからね。それを気に入らない者たちがいることも知つていて。……、薬師さえ傍にいれば、不測の事態が起きても大事には至らないだろう？」

「いっぽ、毒でも盛られて苦しめば良いわ」

「酷いなあ」

楽しげに笑つてから、彼は急に真剣な眼差しでイーディスを見た。

その視線の先には、毛先が灰色になつたイーディスの髪がある。

「思つていたよりも、灰化が進んでいるみたいだね」

「……もう十六だもの、当然よ」

イーディスは、服の袖をまくつてライナスに見せる。指先から肘までが魔力を失つてしまい、薄気味悪い灰色をしていた。

これこそが、魔力の喪失が原因で起こる、灰化と呼ばれる症状だ。「私たち灰の民は、十三を過ぎれば末端から魔力を失い始めて、灰化が進む。……だから、貴方の言うとおり薬が精製できる」

この国で使われる薬は、魔力を帯びた薬草が元になつていて。だが、困つたことに、それらの薬草は一定以上の魔力を持つものが触れると、効能を失つてしまふのだ。

魔力は生命力の一種だ。命あるものは、皆、魔力を持つ。花や虫ならばいざ知らず、人間は薬草を扱うには魔力を多く持ち過ぎた。

それ故に、普通の人間には、薬草から薬を精製することは不可能だった。

薬の精製が可能なのは、徐々に魔力を失つていく灰の民だけだ。灰の民ならば、薬草の効能を失うことなく薬を作ることができる。

「まるで、他人事のよう^{ひとこと}に言つんだね。悲しくはないの？」

「こういつ運命の下に生まれてしまつたのだから、仕方のないことだもの」

イーディスが淡々と口にすると、ライナスは目を伏せた。

「昔の君からは、想像もできなかつた言葉だね。あれほど、灰の民であることを嫌がつて泣いていたのに」

「……、昔とは違つわ。宫廷薬師にもなつて、もう子どもじやないのよ。簡単に泣いたりしない」

「そつなの？ それはそれで、寂しいね。泣いている君を慰めることが、僕はとても好きだつたのだけど」

「……つ、私が泣こうが喚こうが、貴方には関係ないわ^{ひとつき}」

「関係はあるよ。これから一月は、一緒に過ごすのだから」

イーディスは言葉に詰まつて黙り込む。女王の命令で、ライナス

が成人するまでの間、イーディスは彼に仕えなければならない。

「また、よろしくね。イーディス」

イーディスは、ライナスの微笑みから視線を逸らした。

視界の中を鮮やかな赤が舞う。

慌ただしく書類の整理をするイーディスの姿を見ながら、ライナスは堪え切れずに笑みを零した。

「相変わらず、一生懸命で可愛いよね。昔みたいに笑わなくなつていたけど……、お人好しなところは変わらない」

優しく目を細めたライナスに、護衛として控えていたスタンが溜息をついた。

「今さら、どういうつもりだ？」

「……、イーディスのこと？」

「陛下は、お前とあいつが共にいることを苦々しく思つていただろう。新しい傍仕えをつけるにしても、あいつだけは選ばない」

スタンの言葉は正しい。女王は、ライナスが灰の民であるイーディスと共にいることを不快に思つていた。

だからこそ、王立学院を卒業した時、女王はライナスに圧力をかけた。

「うん……、今回のイーディスの異動は、僕の我儘の結果だよ。母上は不満だらけだ」

「一年前、お前はあいつと縁を切つた。そのことに関して、俺は正しい判断だつたと思つていて。甘つたれの餓鬼だつたお前に、同じように現実を知らない餓鬼を守ることなんてできるはずがない。二人そろつて、倒れるだけだ」

「否定はしないよ。あの頃の僕は、今以上に夢見がちな子どもで、

……彼女を傍に置こうにも力なんてなかつた

二年前のライナスは、イーディスと共に過ごした温かな時間も、繋いだ彼女の小さな手も、失われることなど想像しなかつた。周囲の事情や思惑など気にかけることもなく、自分の望みは、すべて叶うのだと信じ切っていたのだ。

愛されていたが故に、我儘で、どうしようもない子どもだった。本当に望んだものが、どれほど手に入りにくくものだつたのか気付けなかつた。

「どうして、今さら、あいつを引っ張りだした。……また、傍に置くつもりなのか？」

頷いたライナスに、スタンは首を振る。

「……、あの髪と手を見る。たとえ、もう一度傍に置けたところで、長くは共に在れない」

イーディスは、既に魔力の喪失 灰化が始まつてから二年も経つている。髪の方は毛先だけで済んでいるようだが、細い腕は肘までが灰色に染まっていた。黒いブーツに隠された足も、同じように灰化が進んでいるだろう。

「……、だから、きっと、これが最後の機会だ」

灰化的果てに、彼女が魔力のすべてを失う日は、それほど遠い未来ではない。

「母上と、賭けをしているんだ」

女王が自分を可愛がってくれていていることを利用して、無理を通して始めた賭けだった。

「来月、僕の成人を祝して、母上が舞踏会を開くことは知っているよね？ その舞踏会で、イーディスが自ら望んで僕の隣にいたら、賭けは僕の勝ち」

「いなかつたら、お前の負け、か。……それで、賭けに負けた時、お前は何を女王に差し出すんだ？」

ライナスの我儘に応じてくれた女王が出した条件は、ただ一つ。

「僕の未来。……勝てば、彼女を傍に置けるんだから、安いものだ

ろう?」「

スタンは呆れたようにライナスに視線を遣つた。

「莫迦だな。たつた一月ひとつきの間で、あいつがお前の元に戻るなんてあり得ないだろう。二年前、酷く傷つけたことを忘れたのか」

「それでも、やるしかない。……、僕は、もう諦めたくない」

ライナスの記憶の中には、いつも、泣きたくなるほど鮮やかな赤を宿して笑う少女がいた。灼熱のような赤に焦がれて止まず、その心を独り占めしたかった。

二年前、それを叶えることはできなかつたが、再び彼女を腕

に抱くことができたならば、一度と離しはしない。

ライナスの傍仕えになつてから十日余りが経つた日の早朝、イーディスは王城の庭園内にある薬草園へと向かつた。そこでは、薬の材料となる薬草を、灰の民である宫廷薬師全員で栽培しているのだ。イーディスも数少ない宫廷薬師の一員だ。ライナスの傍仕えになつてからも、薬師として薬を作る義務があつた。

初めは、傍仕えと薬師の仕事を両立することは辛いだろうと思つていたのだが、ライナスは書類整理程度の雑務しか命じないため、イーディスの負担はほとんどない。あまりにも傍仕えの仕事が少なすぎて、イーディスがいる意味などないようにも感じられた。

女王の考えることは、理解できない。何故、彼女はイーディスをライナスの傍仕えに命じたのだろうか。

薬草園に入ると、既に先客がいた。面識はあるものの、あまり仲が良いとは言えない同僚だ。イーディスよりも五つは年上であろう彼女は、イーディスの姿を目した途端、眉間に皺を寄せた。

その表情を気にすることなく、イーディスは薬草を摘み始める。自分が同僚の灰の民たちから嫌われていることは知つていたので、あえて、声をかけるつもりもなかつた。

だが、暫く無言で作業をしていると、同僚の女が口を開いた。

「あんた、第五王子の傍仕えになつたんだって？」

同僚の言葉に、イーディスは小さく頷くだけで何も言わなかつた。その態度が気に喰わなかつたのか、彼女はさらに続ける。

「良いなあ、するいなあ。第五王子って言つたら、陛下のお気に入りじゃないの。陛下も良いお歳だし、次の王は、第五王子になるかもしけないつて、宫廷では結構な噂よ」

「……、だから？」

イーディスがうんざりしたように呟つと、彼女はイーディスに近寄り、胸倉を掴みあげてきた。

「なんで、あんたばかり良い思いをするの」

イーディスは内心で溜息をつく。嫌われ者になることは、学院でライナスの隣にいた頃に慣れているが、このように行動に移されたのは久しぶりだった。

「前々から気に喰わなかつたのよ。陛下の覚えもめでたくて、学院には特別に十の頃から入学を認められて……、おまけに在学中は第五王子にべつたり」

十歳の頃、宫廷薬師をしていた両親を灰化で失つたイーディスは、すぐさま学院への入学を女王から命じられた。その命令を断ることなどできるはずもなく、イーディスは入学資格である十三に届かなければ、特別に王立学院へと入学したのだ。

それは、国ができるだけ長く灰の民を使おうとした結果でしかないが、他の者たちからしてみれば、女王から**巣廻**^{ひいき}されているように見えたのかもしれない。

「良いわよね。あたしたち灰の民なんて、国の道具でしかないのに。ちょっと優秀だからって、あんただけ特別扱い」

「……、何が言いたいの？」

「何も。ハつ当たりしたいだけよ」

次の瞬間、頬を打つた熱にイーディスは顔を歪めた。

「これくらいの可愛い嫉妬は赦してくれるでしょう？　もう数年もすれば、あたしはあんたより早く死ぬんだから」

イーディスの胸倉を放して、同僚の女は薬草園を去つていく。

魔力の完全なる喪失は、死と同義だ。

少しづつ魔力を失つていく灰の民は、長くて三十年、たいていは二十数年で寿命を迎える。

初めから、長くは生きられない運命にある。
頬の痛みなど、暗闇に閉ざされた未来を感じる痛みに比べれば、大したことではない。

イーディスたち灰の民は、短い生涯を国に捧げて、道具のようを利用してされることしかできないのだ。それが、王からの庇護を受ける

代わりに、過去の灰の民たちが選んだ道だ。地方の権力者たちに酷使されて、次々と死んでいった悲惨な時代を思えば、道具である今の方が扱いは良い。

イーディスは、血が滲むほど強く唇を噛んだ。

学院にいた頃に抱いていた夢や希望は、すべてまやかしに過ぎなかつた。幸せな日々は呆気なく終わりを迎えて、夢も希望も泡のように弾けた。

最早、すべてを諦めて、最期の時を待つことしかできない。

摘み終わった薬草を籠に入れて、イーディスは立ちあがった。

薬草園を出ると、近くの庭園を管理している初老の庭師の姿があった。

「おはようございます」

「薬師のお嬢さんか。今日も朝早くから偉いね」

庭師は、皺の寄つた顔でイーディスに笑いかける。切り落とした花を何度も貰い受けたことが在るため、彼とはそれなりに面識があつた。

「今は第五王子に仕えているのだったかね？　の方は、立派な方だと聞くよ。お嬢さんは運が良い」

ライナスを褒め称える庭師に、イーディスは曖昧な笑みを浮かべる。

「……、ありがとうございます」

ライナスの外面が立派なことは認めるが、その人柄は庭師が思うようなものではない。優しげな笑みを浮かべているものの、彼は自分を含めた世界のすべてを見下しているような、捻くれた人間なのだ。

「ああ、そうだ。切つたばかりの花があるんだよ。また、貰ってくれるかい？」

庭師が指差した先には、庭の外觀を整えるために切り取られた花々があつた。イーディスがいつも相手にしているような薬草と違い、色鮮やかで美しい観賞用の花だ。

「何色が良いかい？」

優しく聞いてくる庭師に、気付けば、イーディスは応えていた。

「赤を。……赤い花を、ください」

何処か切実な響きを持ったイーディスの声に、初老の庭師は首を傾げた。

庭師から貰い受けた花を片手に、ライナスの部屋へと入る。

「おはよっ、今日はいつもより少し遅かったね」

書類を片手に立っていたライナスは、イーディスの顔を見るなり眉をひそめた。

「それ、…………どうしたの？」

腫れて熱を持つているイーディスの頬を見ながら、ライナスが問う。

「…………壁に、ぶつかつたの。来るのが遅くなつたのは、花瓶を取りに行つていたからよ」

壁にぶつけたなど大嘘であるが、ライナスはそれ以上追及してこなかつた。イーディスのことなど、大して興味がないのかもしない。

あらかじめ水を入れておいた花瓶に、イーディスは赤い花を生ける。

「綺麗な赤だね。君の髪に似ている」

イーディスが花に込めたわずかな想いを暴いて、ライナスは笑う。赤い花を選んだのは、諦めの悪いイーディスの意地だったのかもしれない。

「そんなことをしなくても、僕は君を忘れないよ」

一年も前に見捨てられたというのに、イーディスは、未だにライ

ナスのことを嫌つていない。それどころか、心のどこかで、昔のように戻れるかもしれないという淡い期待まで抱いているのだ。自分のことではあるが、その愚かしさに吐き気がした。

口では嫌いなどと言いつつも、心は彼を好いていた一年前と変わらない。すべて諦めると決めたといつに、イーディスはいつまでも過去に縋っている。

暗闇に閉ざされた未来よりも、幸せだった過去を望んでいるのだ。

「……、赤い花しか、なかったのよ」

「君がそう言つなら、そういうことにしておこうか」

彼は笑いながら肩を竦めた。

「ああ、そうだ。明日から、四日間は君に任せせる仕事がないから、離宮には来なくていいよ」

そう言つてから、ライナスは奥の部屋へと消えた。その背中を、とても遠く感じた。

イーディスは、灰色の指で赤い花弁に触れる。

「……、忘れるわよ、きっと」

イーディスの咳きは、ライナスに届くことなく消えた。

薄らと目を開けて、ライナスはまどろみから覚醒する。

前髪をかき揚げなら、ソファに寝転んでいた身体を起こした。窓の外を見ると、既に日が沈んでいる。仮眠のつもりだったが、随分と長く寝ていたようだ。

先ほどまで見ていた夢が原因で、気分はあまり優れなかつた。

「もう夜になる。どれだけ、寝るつもりだつたんだ？」

呆れたようなスタンの声に、ライナスはゆっくりと彼に視線を遣つた。

「一年前のこと、……夢で見たよ」

ライナスの沈んだ声に、スタンは溜息をついた。

「……、王立学院を卒業した日のことか」

イーディス・ティセ・ディオルは諦める。

一年前の女王の言葉が、ライナスの脳裏で何度も繰り返される。母である女王から特別愛されていることを知っていた分、あの頃のライナスは望めば何でも手に入ると思つていた。

それ故に、女王の言葉が信じられなかつた。

「母親としても、女王としても、……灰の民を、僕の傍に置くことは赦せなかつたのだろうね」

灰の民は、国の庇護下に在る代わりに、未来を選ぶことができない。身の安全を保証してもらつたため、彼らは道具となることを選んだのだ。

道具に恋する王子を、女王が赦せるはずがない。何処かの貴族の娘や異国の姫と結ばれた方が、国にとっても有益であり、親としても嬉しいのだろう。

「イーディスは、……僕を置いて、遠くない未来に死ぬ」

ライナスたちが当然のように想像している未来を、灰の民たちは手にすることができない。彼らに与えられた時間は、ライナスたち

よりもずっと短い。

それを分かつていながら、ライナスはイーディスに手を伸ばした。長くは共に在れないと知りながらも、傍にいるのは彼女であつてほしいと願つた。

「諦めようと思ったこともある。僕が傍にいない方が、彼女は幸せになれるのではないかと、考えたこともあつたよ」

だが、そう思う度に、灼熱のような赤が胸を焦がす。

「でも、諦めることなんて、できなかつた。……、叶うなら、傍にいてほしいんだ」

「……、知つている。俺は、お前があいつのためにしてきた努力も、ずっと、見てきたんだ」

ライナスは、イーディスを蝕んでいく灰化を止めたかつた。暇潰しのつもりで入つた王立学院だつたというのに、必死で学び、魔力の研究に力を注いだのは、彼女を助けたかつたからだ。

「結局、……彼女を救う術は、見つけられなかつたけどね」

だが、その研究が実を結ぶことはなかつた。結果を求めれば求めるほど、絶望を突き付けられた。

彼女を救う術など、何処にもないと思い知らされた。

「それでも、お前の想いは無駄にならない。……無駄になど、させるものか」

眉間に皺を寄せたスタンに、ライナスは苦笑した。

離宮に入り、慣れた様子でライナスの部屋へ向かうと、入口には青い顔をしたスタンの姿がある。

「ああ、……もう、四日経つたのか」

小さく欠伸をしながら、スタンはイーディスに向かつて言つた。

彼が気を抜いたところなど滅多に見られないのだが、それほど疲れているのだろうか。

「なんだか、お疲れみたいね」

「ライナスが、自分の研究にかまけて仕事を溜めていたのが悪い。おかげで、護衛の俺まで、この四日間は寝不足だ」

「……、ライナスの研究、上手く行ってないの？」

「……、上手く行つてないというより、元から上手く行くはずがなかつた。ライナス自身も、結果に關しては覚悟していたようだが、相当堪えたようだな」

「……そう。ライナスは、中で休んでいるのよね？　今日は帰った方が良い？」

「お前を勝手に帰らせると、あいつの機嫌が悪くなつて面倒だ。せめて、顔だけでも出していけ。流石に、もう起きているだろう」溜息混じりのスタンの言葉に頷いて、イーディスはゆっくりと扉を開けた。

「ライナス……？」

彼の名を呼んでみるが、返事はない。やがて、イーディスは、静寂が支配する室内に小さな寝息が響いていることに気が付く。

「こんなところで、寝ていたの？」

四日ぶりに会つた彼は、ソファで横になり寝息を立てていた。立派な青年へと成長したライナスには、少年らしいあどけなさは残つていない。それでも、あの頃と変わらぬ寝顔に見えたのは、何故だろうか。

イーディスは、彼の柔らかな金髪に手を伸ばす。初めて会つた時、この髪と瞳が、太陽のようだと思ったことを憶えている。

人々を照らし、恵みを与えてくれる、優しい陽光のように感じた。彼の人柄は、そのような優しくて柔らかなものではなかつたが、それでも、彼がイーディスに夢と希望を与えてくれたことに変わりはない。

ライナスの傍にいればいるほど、何度も忘れようとして、そ

れでも、忘ることのできなかつた彼との思い出が心を乱す。

手を繋いで、大樹に身体を預けて眠つたこと。

スタンに見張られながら、図書館で一人して試験の勉強をしたこと。

十三歳になり、始まつた灰化に泣き喚いたイー"ディスを、強く抱きしめてくれたこと。

赤い髪を、好きだと言つてくれたこと。

「……、イー"ディ、ス？」

ライナスが長い睫毛に縁取られた瞼をゆつくりと開いた。彼の髪に触れていた手を離して、イー"ディスは苦笑する。

「……、起きたのね。もう、昼になるわ」

軽く目を擦りながら、ライナスが溜息をついた。

「酷い顔色をしているわ。まだ、休んだ方が……」

「いや、大丈夫だよ。それに、顔色が悪いのは君の方だ。また、無理をしていたの？」

眉間に皺を寄せて、まるで心配するかのように彼の手がイー"ディスの額に伸ばされた。

その手を拒むことが、イー"ディスにはできなかつた。

嫌いに、なれない。

あんなにも幸せだつた過去を、イー"ディスの心は憶えている。

優しく頭を撫でて、眩しいほどの温かさを与えてくれた。焦がれて止まなくて、ずっと、欲しかつた人が目の前にいる。

手に入らないと知つたのに、この手を伸ばしたくなつてしまつ。ライナスと視線を合わしていることが居た堪れなくなり、イー"ディスは彼から視線を逸らした。

すると、室内に飾られている花が視界に入る。

「まだ、飾つていたの……？」

その花は、四日前にイー"ディスが飾つた花だつた。鮮やかな赤を宿していた花は、今ではイー"ディスの髪や腕のようになじみ染まつている。

「せつかく、君が飾つてくれた花だからね」

イーディスは花瓶の元まで歩き、中から花を取り出して目の前に翳した。数日前までは誇らしげに咲いていた赤い花も、花弁や根の先端が灰色になり、今では惨めなものだ。

「灰化が進んでいる。すぐに朽ちるわ」

「……、それでも、綺麗な花だよ」

ライナスが何を思つてこの花を綺麗と賞したのか、イーディスには分からなかつた。

「綺麗じゃないわ。とても醜いもの」

この花がすべての魔力を失つて、朽ちる日は遠くない。

「私と、同じ」

灰色に染まりゆく自らの身体を思い出し、イーディスは自嘲した。生きながらに魔力を失う自分は、この花と同じように醜く朽ちる。

「……、イーディス」

咎めるように名を呼ばれて、イーディスは薄笑いを浮かべた。他に、どのような表情をすれば良いのか分からなかつた。

「私が長く生きられないことを知つていたから、貴方は私の縁を切つたの？」

ライナスは、イーディスの質問には答えない。代わりに、質問を返して來た。

「君は、……卒業の日、僕を待つていてくれたの？」

「待つっていたわ。でも、貴方は最初から来るつもりなんてなかつたのね」

王立学院を卒業した日のことは、今でも鮮明に憶えている。彼と交わした約束を信じて待ち続けた時間が、傷となつてイーディスの心に刻まれている。

「あんなに一緒にいたのに、……私は、貴方の嘘一つ見抜けなかつたの」

学院にいた頃、イーディスはいつもライナスと共にいた。あの頃、あれほど近くに感じていた彼は、今では遠い場所にいる。身体は近

くにあつても、心は遠く離れてしまった。

だが、そのことを受け入れなければならないのだ。

「……、約束を破られたことは、貴方に縁を切られたことは、辛かつたわ。だけど、あれで良かつたのかもしれないと……、今は思うの」

独り言のように、イーディスは呟いた。

イーディスとライナスの関係は、王立学院を卒業する日に終わるべきだった。それこそが、逆らうことのできない運命だったに違いない。

「貴方は、ずっと私は私の傍にいてくれない。この国の王子なんだもの」

利用価値のある道具でしかない灰の民と、女王の寵ちようを受ける第五王子。誰が見ても、釣り合う存在ではない。一人の間を隔てる壁が、幼かつたイーディスには見えていなかつた。ただ、それだけのことだつたのだ。

「イーディス」

優しい声音に、一瞬、学院にいた頃のライナスの姿が脳裏に浮かぶ。

「もし、君が死ぬまで傍にいてあげると言つたら、……喜んでくれる？」

突然、背後から抱き竦められて、イーディスは手に持つていた花を落とした。頭の中が真っ白に染まる。

彼の言葉が嘘であることなど分かつてゐる。

だが、そつと髪に口づけられて、心の水面に漣れんが立つた。

「……、放して」

温もりを拒絶するための声は、消えてしまいそうなほどに小さかつた。これでは、イーディスが今の状況を受け入れてゐるかのようだ。

イーディスは、浅く呼吸を繰り返して心を静めよつとする。

「君がいてくれるなら、僕は、何も要らないんだ」

耳に届いたのは、嘘で塗り固められ、どこまでも勝手な響きを持つている言葉だ。それなのに、動搖してしまった自分が信じられなかつた。

「……つ、嘘つ、き」

イーディスは手足を乱暴に動かし、彼の腕から逃れる。

不思議なほど屈いでいるライナスの瞳を見つめて、イーディスは叫んだ。

「嘘つき、嘘つき！ 最初から、約束なんて守るつもりなかつたくせにつ……！」

「……、違うと言つても、君は信じないだろうね」

「信じないわよ！ だつて、ずっと待つっていたのに、貴方は来なかつた！」

彼の言葉を疑うこと知らぬほど、イーディスは彼を慕つていた。彼がイーディスとの約束を破ることなど、考えもしなかつた。

「期待させるような嘘をついて、……傷つけるだけなら、どうせ離れるなら！ どうして、もっと早く見捨ててくれなかつたの！」

イーディスは、泣きながら部屋を飛び出した。これ以上、ライナスの近くにいたくなかった。

離宮を出て、イーディスは胸元を抑え込む。

嘘だと分かっている言葉に、イーディスは喜びを感じてしまった。

それは、ライナスへの好意を棄て切れていない証拠だ。

心の奥深くまで、彼の言葉は沁み込んでいく。いつだつて、イーディスを惑わすのは彼なのだ。

視線の先には、魔力を失い灰色になつた手がある。

魔力とは生命力の一種だ。それは、正常な状態に命を保つため、必要不可欠な力。

イーディスたち灰の民は、齡十三を過ぎると、身体の末端から徐々に魔力を失っていく。灰の民は、魔力の器である身体と魔力の相性が極端に悪い。それ故に、ある程度の時間が過ぎると器と魔力が反発を始め、生きながらに灰化が起こるのだ。

「……、もう、やだ」

徐々に灰色に変わりゆく手を見つめて、イーディスは声を押し殺した。

一度始まつてしまつた灰化は、決して止まることはない。遅かれ早かれ、イーディスは生きながらにして魔力のすべてを失うのだ。

灰の民の寿命は長くても三十年、たいていは二十数年だ。十六であるイーディスは、早ければ、あと数年で死んでいく。

抱き竦められた時に感じた温もりを思い出して、イーディスは身を震わせた。

傍にいてあげる、そのような言葉に胸が熱くなつた自分は、なんと愚かなのだろう。

胸の奥に閉じ込めていた気持ちなど、思い出したくなかった。

イーディスたち灰の民に、明るい未来など存在しない。誰かを大切に想えたところで、遠くない未来に別れは訪れてしまう。その上、イーディスが大切に思う人には、手を伸ばしたところで届かない。二年前、王立学院を卒業した時、ライナスが会いに来てくれなかつたことは悲しく、イーディスの心に深く傷を残した。

だが、イーディスは、傷つくと同時にほんの少しだけ安堵していたのかもしれない。ライナスへの想いを捨てれば、イーディスは死ぬことに対する恐れを軽くすることができたのだから。

灰化で父母を失くし、孤独になつたイーディスにとって、ライナスは心の拠り所だった。それさえ失えば、イーディスに残るものなど何もない。空っぽになつてしまえば、死さえも受け入れられるはずだ。

「……、ライナス」

すべて、忘れてしまいたい。

そうすれば、訪れるであろう死に怯えることもない。

だが、この胸を熱くする想いを忘れてしまえば、自分が自分でいられなくなるような気もして、また一筋涙が流れた。

第五王子ライナスの成人を祝うために、宫廷は朝から賑わっている。夕刻を過ぎた今も、女官たちが夜に行われる舞踏会の準備をしている。

皆が慌ただしく働く中、イーディスは震える足でライナスの離宮を歩いていた。

「……、ライナス」

ライナスと揉めた日から、イーディスは彼に会っていなかった。傍仕えとしても、宮中に仕える人間としても、仕事を放り出して最低なことをしている自覚はあった。

だが、ライナスはイーディスを責めなかつた。それどころか、スタンを遣いに寄こして、傍仕えの仕事は好きなだけ休んで良いとまで言つたのだ。

そのことを言い訳にして部屋に籠つて薬を作り続けた結果、傍仕えとしての役目を終える今日を迎えてしまつた。

せめて、成人を祝う言葉だけは伝えようと思いつ、イーディスが自室を出たのは夕刻になつてからだ。

「入らないのか？」

ライナスの部屋の前で足を止めていたイーディスに、スタンが声をかける。

「祝いの言葉の一つでも言ってやれ。あいつも喜ぶ」

仏頂面をした彼に肩を叩かれても、イーディスは一步が踏み出せなかつた。

スタンは溜息をついて、扉を開くと同時にイーディスの背を無理やり押した。

「……っ、ちょっと！」

「主の成人を祝うこともできないくらい、お前は薄情ではないだろう」

言い捨てるとき、スタンが勢い良く扉を閉める。

「じんばんは、イーディス」

部屋の中央に、正装に身を包んだライナスの姿があった。凜と伸ばされた背筋、かすかに揺れる金色の髪がとても眩しかった。彼と自分は違う存在なのだと、強く思い知らされる。

「……おめで、とう」「う

遠くなつた彼に、イーディスは消えそうな声で言つた。

「ありがとう。……来てくれないかと思つたから、嬉しいよ。僕の誕生日、憶えてくれていたんだね」

忘れるはずがない。彼が生まれてきたことに感謝し、心から祝つた大切な日だつた。

互いに何を言えば良いのか分からず、暫しの沈黙が落ちる。

憂いを帯びたライナスの顔を見つめて、イーディスは躊躇いがちに口を開いた。

「……、短い間だつたけど、一月、^{ひとつき}ありがとう

「こちらこそ。僕は、昔みたいに君が傍にいてくれて楽しかつたよ。君にとっては、……大嫌いな僕の傍仕えは苦痛だつたかもしれないけど」

イーディスはゆつくりと首を振つた。

「私が貴方を嫌えないと、知つてゐるでしょ?」

口では嫌いと言えようとも、心はそうはいかない。傷つけられたのにも関わらず、莫迦なイーディスは今でもライナスを慕つてゐる。幸せだつた過去の日々が、ライナスへの想いをイーディスの心から捨てさせない。

「そうだね。お人好しな君は、一度好きになつた人間を嫌いになれないと僕は知つてゐた。知つてから、……君の優しさにつけこんだ」

「君の異動を命じたのは母上だけ、それを頼んだのは僕だよ」

「……、え？」

「可笑しいと思つただろう？ 僕の傍仕えを希望する者は山ほどいるし、薬師である灰の民だつて、数は少ないけど君の他にもいる」
彼の言つとおりだつた。イーディスに八つ当たりをした同僚など、数は少ないものの灰の民は他にもいるのだ。傍仕えに灰の民を命じるにしても、イーディスである必要は何処にもない。

「僕は、君に会いたかつた。真っ赤な髪を揺らして笑つた君の……、あの笑顔を、もう一度だけでも見たかつた」

ライナスは過去に思いを馳せるように咳いて、優しい笑みを浮かべた。

「君は僕の太陽だつた。君の傍は心地よくて、僕はその場所が好きだつた」

イーディスは、堪らず泣きたくなつた。

そのようなことを言つながらば、何故、卒業の日に約束を破つたのだ。イーディスはずつと待つっていたと言つのに、彼が来ることはなかつた。

伝えたい言葉があるんだ。

あの日、彼はイーディスに期待を抱かせた。

「今の君は、昔と違う。何もかも諦めて、笑うことと止めて……、自分の殻に籠つてしまつてゐる。それで……、君は幸せなの？」

何故、ライナスが責めるような目で見つめてくるのか、イーディスには理解できなかつた。

「……、勝手なこと、言わないでよ」

昔のように笑えなくなつた理由など、たつた一つしかないことを彼は知つてゐるはずだ。

父母を亡くしたイーディスにとって、心の支えはライナスただ一人だつた。

子どもだつたイーディスが、自分と同じように寂しさを携え、傍

にいて対等に扱ってくれるライナスに惹かれないわけがない。意識的にも無意識的にも、当然のようには彼を支えとする。そのことを、聰いライナスは知っていたはずだ。

それなのに、卒業の日、彼は約束を破つた。それだけではなく、一方的にイーディスとの縁を切つたのだ。

「殻に籠ることは悪いことなの？ 傷つきたくないから、逃げるこの何処が悪いのよ。生きながらに魔力を失う恐怖なんて、貴方は分からぬでしょ？……！」

ライナスが好きだと黙ってくれた赤い髪さえも、毛先から徐々に灰色に染まつっていく。少しづつ、誇れていたはずのものが失われていく。

すべてを失くして、最後には、朽ちていくのだ。

傍にいた人を置き去りにして、父母のように若いうちに死んでいってしまう。大切な人を置いていく痛みも、置いて行かれる寂しさも、イーディスは知つていた。

欲しいものなど、手に入つたところで意味はない。

そして、イーディスが本当に欲しかつた人は、手に入るはずがなかつた。

「どうせっ……！ 手を伸ばしたつて、欲しいものなんて手に入らない！ それなら、何も思わず生きていた方が良い。何にも望まないで、誰も想わないでいた方が、……死ぬことが怖くないもの！」すべてを、諦めようと思った。何も望まずに、誰も想うことなく生きるのだ。そうすれば、死への怯えを少しでも軽くすることができる。生きることへの執着をなくせば、死を受け入れられると信じていた。

そうでもしなければ、己の運命を認めることなど、イーディスにはできなかつた。

「……つ、嫌なのよ。何かを望むことも、手に入らない人を想うことも！」

望んだところで、想つたところで たとえ、手に入つたところ

で、最後には何の意味もなくなってしまう。

ライナスは、冷めた目でイーディスを見た。

「遠くない未来に死ぬから、何も望まないの？」

その態度に、イーディスが一瞬怯んだことを彼は見逃さない。

「違うだろ。君が全部諦めようとしているのは、ただの怯えだ。君は望みが叶わずに絶望することも、想いに応えてもらえずに失望することも、味わいたくないだけだよ。だから、自分の寿命を言い訳にして生きている」

「……っ、違う」

必死の反論が何よりの肯定であることに、イーディスは気付いていた。だが、それを認めてしまえば、この一年間、自分は何をしていたのか分からなくなる。

「僕は君が心配なんだ。いつだって、君の存在が心に在る」

イーディスが両手で耳を塞ぐとすると、近寄ったライナスがその手を強く掴んだ。

「どうか、聞いて。ずっと、君だけが僕にとって大切な子だと、知つてほしい」

優しい響きを持った言葉に、イーディスは唇を噛みしめる。いつそう夢だと思ったかつたが、強く握られた手に走る痛みが、これが現実であることを訴えてくる。

「……っ、それなら、…………どうして、来てくれなかつたの？」

唇から、言うつもりのなかつた問い合わせ零れ落ちてしまう。

卒業の日、イーディスは彼を信じて待ち続けていた。だが、彼が来ることはなかつた。何か事情があつたのかもしれないと思い、彼に会おうとしたが、そのすべては拒絶された。

一方的に切られた縁は、二年間戻ることはなかつた。

心の支えを失つたイーディスは、与えられた宫廷薬師の身分を楯に部屋に籠り、逃げるように仕事に没頭した。それ以外に、どうすれば良いのか分からなかつた。

「君に伝えたいことがあつた。だから、……約束を破るつもりなん

て、なかつた」

伝えたいことがあるから、学院の庭で待つていてほしいと彼は言った。イーディスが笑顔で頷くと、必ず来るから、と彼は約束してくれた。

「だけど、あの頃の僕は子どもで、周囲や自分の立場を本当の意味で分かつていなかつた。君を守る力を持つていなかつたのに、僕は、この想いを君に伝えようとしてしまつた」

イーディスが顔をあげると、金色の瞳が柔らかに細められた。

「好きだよ、イーディス」

イーディスの頬を、彼の両手が包む込む。

「君の時間が限られたものだとしても、僕は君に幸せであつてほしい。全部諦めたりしないで、昔のように笑つて生きてほしい」

そつと額を重ね合わせて、彼が微笑んだ。

「一緒にいよう。僕の傍で笑つていてほしい。……あの日、君に、伝えたかった言葉だ」

彼の唇が優しく額に触れて、イーディスの頬を冷たいものが伝つた。

「さよなら。イーディス」

ゆつくりとした足取りで、彼が去つていく。その背中を見つめながら、イーディスは床に崩れ落ちた。

「……、ライナスは、行つたのか」

部屋に入つて来たスタンの言葉に、イーディスは応えない。今までの出来事が信じられず、両手で顔を覆つて頭を振る。頬を、涙が濡らしていた。

「……つ、好き？」

優しい笑みと共に告げられた想いが、胸をかき乱していた。

「嘘、でしょ？」

一年前、彼はイーディスとの縁を切つた。

それは、長い間、イーディスのことを疎ましく思っていたからなのだと、心の何処かで感じていた。三つも年下の小娘で、王子である彼には到底釣り合わない灰の民だ。口にしていなかつただけで、イーディスのことを厭つていたのではないかと思つていた。

「嘘ではない。……二年前、王立学院の卒業式の後、女王陛下がライナスに苦言をしたことを知つてゐるか？」

そのようなこと、聞いたこともなかつた。

「灰の民を、何時まで傍に置くつもりだ。守れる力も持たないというのに、その人生を背負うことなどできるのか」と

いつも無愛想なスタンの声は、わずかに上擦つていた。

、十四のイーディスは、何も考えていなかつた。

王立学院を卒業してからも、自分とライナスの関係は何一つ変わらないと信じていた。目の前の現実にさえ気付かずに、二人を取り巻く環境が変わつても、彼との関係は続くものだと疑いもしなかつたのだ。

それは、ライナスも同じであつたのだろう。だが、彼は目の前に広がる現実を、卒業の日に女王の手で知つた。

「学院を卒業したばかりのライナスは、第五王子という力以外、何も持つていなかつた。その力も女王の前では意味などない。……お前と共にいたいと願つても、叶える力など何処にもなかつた」

スタンは目を伏せた。

「ライナスは、女王と賭けをしている。あいつが必死で掴み取つた最後の機会だ。……だから、あいつには、賭けに勝つて望みを叶えてほしい」

座り込んでいたイーディスを立たせて、スタンは問う。

「イーディス・ティセ・ディオル。お前は、何故、ライナスの傍にいたかつた？」

イーディスは、強く拳を握りしめて息をついた。

ライナスと初めて会つた時、彼は仮面のような笑顔を張りつけていた。外面は立派な第五王子だったが、中身は捻くれた少年だった。

世渡りが上手くて猫かぶりで、内心では自分も他人も含めた世界のすべてを見下しているような男の子だった。

最初は彼のことなど、好きではなかった。つすら寒い笑顔とともに口にされる皮肉や意地悪な態度に、苛立ちや怒りがなかつたと言えば嘘になる。

だが、傍にいるうちに、彼は少しづつ自然な笑顔を見せてくれるようになった。その笑みを知るうちに、彼がとても寂しい人であることを分かつてしまつた。

「……寂しかつたの」

イーディスも、寂しかつた。

灰化により父母を亡くし、身寄りのなくなつたイーディスには、女王からの命令を断ることなどできなかつた。命じられるままに入学した王立学院では、周りは自分よりも年上で、向けられる視線も決して優しくはなかつた。

その中で、ライナスだけがイーディスを対等に扱つてくれた。彼自身が見下す世界の一部として、彼はイーディスを自分と対等な存在として見たのだ。決して、善意や優しさから対等に扱われたわけではなかつたが、イーディスは嬉しかつた。

それは、心にあつた寂しさが消えていく切欠となつた。

「一緒にいれば、……寂しくないと、思ったの」

彼と共にいるうちに、イーディスの寂しさは満たされた。二人で寄り添つて手を繋いでいれば、あの頃のイーディスは、死への恐怖に打ち勝てた。

思い返せば、そこには優しい記憶が溢れている。彼と共に過ごした日々の中で傷ついたことも数多くあつたが、イーディスは確かに幸せだつたのだ。

「ずっと、隣にいたかった。ただ、それだけが、望みだつた」

手を繋いでいたら、それだけで良かつた。隣に居られれば、他には何も望まなかつた。

イーディスは、彼の傍で生きたかったのだ。

「……、その望みを、お前は諦められるのか？」

すべて、諦めれば良いと思っていた。

そうすれば、遠くない未来に迎えるであろう死を受け入れられる

と信じていた。

暗くて何も見えなかつたはずの未来。だが、それは本当に暗闇に閉ざされていたのだろうか。

違うはずだ。

太陽はずつとイーディスを照らしていた。頑なに目を瞑り、気付かないふりをしていただけなのだ。

イーディスは、零れ落ちた涙を拭つて立ち上がった。

派手な衣装を身に纏い、煌びやかな装飾品をつけた人々が、舞踏場を賑わしていた。

今夜の主役であるライナスは、舞踏場の隅に立ち、声をかけてくる者たちを適当にあしらっていた。いつも張りつけていた笑みさえも今日は上手く作ることができず、舞踏会の参加者たちは不思議そうにライナスを見ている。

自分の成人を祝す舞踏会だが、少しも嬉しくなかつた。

「一人か？ ライナス」

背後から聞こえた声に、ライナスは振り向く。

「……、母上」

黒いドレスを身に纏つたガレン国の女王が、グラスを片手に嬉しそうに笑っていた。

「賭けは私の勝ちのようだな」

その言葉に、ライナスは曖昧な笑みを浮かべる。

この舞踏会が終わりを迎えるまでに、イーディスがライナスの元に来なければ、ライナスは賭けに負ける。

おそらく、彼女はライナスの元へは来ないだろう。一年の歳月は彼女を臆病にしていた上に、一度拗れた関係を修復することは、ライナスには無理だったのだ。

「……、まだ、時間ではありませんよ」

しかし、ライナスは未だに淡い期待を抱かずにはいられない。我ながら諦めが悪いことだが、それほどまでに好きなのだから仕がない。

幼い頃から女王の寵を受けていたライナスは、好き勝手振る舞うことを見逃させていた。だが、与えられるすべては灰色にしか見えず、心搖さぶられるほど強く望むものはなかつた。

ライナスの心は、いつも空虚を抱えていて、満たされることはな

かつた。それを寂しさだとも知らなかつた。

そして、気紛れに入学した王立学院で、ライナスはイーディスに
出逢つた。欠けた何かを補うように、満たしてくれるようにな、彼
女の存在はライナスを幸福にした。

何もかも興味がなくて、世界を見下していたライナスの心に触れ
てくれたのは、イーディスだけだった。それは彼女の幼さが生んだ
偶然だつたのかもしれないが、それでも、ライナスは嬉しかつた。
生まれて初めて、誰かを強く望んだ。灰色の世界で、唯一の色を
持つた鮮やかな灼熱の色。心を焦がさずにはいられなかつた、ライ
ナスの心を焼け付かせる真っ赤な太陽。

幸せに生きてほしかつた。できることならば、傍にいてほし
かつた。

「お前らしくない、負けを前提にしたような賭けだつたな。……、
だからこそ、私もお前の我儘を聞き入れたのだが」

「……、僕の我儘を汲み取つてくださり、感謝しています」

イーディスを傍に置きたいといふ、ライナスの我儘。それは、女
王が聞き入れるには度が過ぎた願いだつたが、彼女は賭けと言う形
で応じてくれた。

「これから賭けに勝つ気などなく、……ただ、あの子に会いたかつ
ただけか」

「……、負けるつもりは、ありませんでしたよ」

「嘘をつくな。あの子が、今さらお前の傍に戻るとは思つていなか
つたのだろう？　あと数年も生きられぬかもしないあの子に、お
前を選べと言つるのは酷だよ」

女王は意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前は健気な子だな。この一年、……あの子のために、灰化を阻
止する研究までしていた」

「……、ご存知でしたか」

「息子の愚かしい行動くらい、母親として知つていて当然だ。……

灰の民は、生きながら魔力を喪失していくから希少なのだ。灰化を

阻止するための研究など、国の不利益にしかならないと分かっているだろうに」

灰の民は、生きながらに灰化を起こすからこそ、薬を精製できるという価値を持つ。彼らは国に利益をもたらす道具でしかない。女王は、そのようにしかイーディスを見ることができない。支配者にとって、必要なのはイーディスの心ではなく、道具としての価値だ。「……、結果は、出なかつたのだろう?」

ライナスは、頷いて肯定の意を示す。結局、ライナスはイーディスを灰化から救う術を手にできなかつた。むしろ、研究を進めたことで、彼女を救う手立てなど存在しないことを突き付けられた。彼女の身体ごと取り換えでもしない限り、灰化は止まらない。そして、それを行えるだけの技術は、今の時代にはない。もし、その技術が完成したとしても、それは数百年も後の話だろう。

「ライナス。私は頭の良いお前を気に入っているし、特別愛している。あの男が私に遺してくれた、大切な忘れ形見だからな」

ライナスの他にも息子を持つ身でありながら、女王はライナスを特別に可愛がる。それは、ライナスの父親が彼女の愛した男であるからだろう。

灰の民を傍に置いてほしくないという親心も、理解はしていた。
「イーディス・ティセ・ディオルは諦めろ」

ライナスは目を伏せた。

「この恋は、決して、祝福されるようなものではない。ライナスが歩んでいく未来で、イーディスの存在は汚点になると周囲は思うだろう。ほんの短い時間しか共に在れないイーディスのために、人生を棒に振つていいかのように見えるはずだ。

それでも、彼女を望んだのは自分だ。遠くない未来に別れが訪れるとしても、傍で笑つていてほしいと願つた想いは、何物にも代えがたいライナスの真実。

「未来のないあの子は、王となるお前に相応しくない」と言つたとえ、女王が己を王に推すつもりであろうとも、それはライナ

スの望みではない。

「**ヒイキ**も度が過ぎれば、非難を浴びますよ。……、次の王は、兄上たちの中からお選びになるべきです」

「愛した男の息子に跡を継がせたいと思うのは、母として当然のことだろう? お前の兄たちも可愛い息子だが、あの子たちは、私が欲しかった血を継いでない」

「ガレン国の女王は、後継者選びに私情を挟むのですか」

「恋愛に浮かされ、母親に女を強請る息子よりは、良いと思うがな」ライナスが言葉に詰まるとき、女王は笑んだ。

「お前の未来は私が選ぶ。それが、お前が負けた時の約束だ」

「……、ええ、そうですね」

ライナスが投げやりに応えると、急に、舞踏場が騒がしくなった。「何やら騒がしいな」

女王が咳くと同時に、ライナスは人混みの中に鮮やかな赤を見た気がした。

ライナスの隣にいた女王が、驚いたように目を見開いた。ライナスもまた、信じられなかった。

喧騒を打ち破るように少女の叫びが耳に届く。それは、ずっと欲しかった少女が、己の名を呼ぶ声だった。

ライナスがいる舞踏場へと、イーディスは走っていた。後ろでスタンが何か言っていたが、今は頭に入らない。

ただ、ライナスの傍に行きたかった。

「その女、止まれ!」

イーディスの姿に気づいた警備兵が叫ぶ。その怒声に怯むことなく、イーディスは走り続けた。警備兵の一人が、剣を引き抜いてイ

「通して」
「一デイスに向けた。

「通して」

舞踏場への道を妨げる剣に足を止めたイーデイスは、警備兵を睨みつけた。

「……っ、貴様！」

一步も動かさずに見つめて来るイーデイスに、痺れを切らした警備兵が剣を振り上げる。

瞬間、イーデイスを庇うように振り上げられた剣を受けとめる者が現れる。

「……、スタン？」

「……、お前は、莫迦なのか。一人でライナスの元まで辿りつけるはずがないだろ？」

呆れたように眩いで、スタンは警備兵を見た。

「通せ。ライナス様の望みだ」

スタンがライナスの護衛であることを知っているのか、警備兵は困惑したように瞳を揺らした。

「……っ、しかし！ 誰も通すなど、陛下からのお達しです」「なるほど。……陛下も、本気というわけか」

剣を握り直して、スタンはイーデイスの肩を叩いた。

「ここは俺に任せろ。少しくらいなら、時間稼ぎしてやる」

彼の言葉に強く頷いて、イーデイスは舞踏場へと飛び込んだ。

突如姿を現したイーデイスに、談笑をしていた貴族たちが目を丸くする。

舞踏場の隅に、眩い金色を見つけた瞬間、イーデイスは駆け出した。騒然となつた会場の中、転びそうになる足を必死で動かす。視線の先には、ライナスしかいなかつた。

「……っ、ライナス」

目を閉じて耳を塞いでいた。そうすることことで、臆病な心を守りとした。それが逃げだと知りながら、イーデイスは世界を拒絶した。

だが、見えなくても、聞こえなくても　温かな日の光を、いつ
だつて感じていたはずだ。

「ライナス、……っ、ライナス！」

太陽は、いつだつてイーディスの心にあつた。ずっと、照らし続
けてくれていたのに気付かないふりをしていた。
この身のすべてから溢れ出す想いのままに、イーディスは声を張
り上げた。

「何処にも行かないでっ……、傍にいて！」

ライナスの身体に、イーディスは勢い良く抱きついた。彼の背に
腕をまわして強く力を込める。

何もかも、諦めようと思つていた。

だが、この人だけは諦めたくない。

「……、イーディス？」

堪えていた涙を目に溜めて、イーディスは彼を見上げた。

「私の未来は限られている……、だけど、一緒が良いの。笑つてほ
しいと願つてくれるなら、……貴方が私を笑顔にして、ライナス」
それこそが、イーディスの幸せだ。

彼の手が躊躇うように、ゆっくりとイーディスの背に回された。
望み続けた人が、イーディスに応えてくれている。彼の胸に顔を
埋めて、イーディスは大粒の涙を零した。

「賭けは、僕の勝ちですね」

女王が、大きな溜息をつく。

「ライナス。お前は、きっと、不幸になるよ。灰の民を選んだこと
を、いつか後悔する」

「いいえ。　僕は、幸せになります」

ライナスの声が、力強く舞踏場に響いた。

「母上。今まで、愛し育ててくださったこと、感謝しています」

「親不孝者が。……お前のような息子は、私から願い下げだよ」

言葉こそ辛辣だったが、女王の声は優しい響きを持っていた。

「ライナス・レト・エレン・シルファ・ガレン」

ガレン国第五王子。自らの息子の名を、女王が厳かな声で呼んだ。

「貴殿から、王位継承権をはぐ奪する」

女王の宣言に、その場にいた誰もが言葉を失う。

「以後、臣下として、ガレン国に力を添えよ」

「拝命、承りました。女王陛下」

ライナスは、琥珀の瞳を細めて嬉しそうに笑った。

木漏れ日が寄り添う一人に降りかかる。

麗らかな陽気の中、イーディスは目を擦つた。

「眠いの？」

ほとんどが灰色に染まってしまったイーディスの髪を撫でながら、ライナスが問う。返事の代わりに、甘えるように彼の肩に頭を預けると、彼は優しくイーディスの手を握ってくれた。

繋がれた手の感触に、イーディスは懐かしい記憶を思い出す。

学院にいた頃も、一人で木陰に座りながら休んでいたことがあった。繋がれた手の大きさは変わってしまったが、その温もりは昔と変わらない。

そのことがくすぐつたくて、イーディスは目を細めて笑う。

「どうして、笑っているの？」

「昔も、こうやって手を繋いだことを思い出したの」

「ああ、一緒に抜け出して、良くスタンに怒られていたね。一人して彼に怒られたのは、学院にいた頃だけではないけど」

イーディスは小さく頷いた。

「そうね。学院にいた頃も、十年前からも、スタンには怒られてばかりだわ」

「だけど、……今日は、きっと怒られないよ」

少しだけ寂しげな声に、イーディスは内心で首を傾げた。だが、ライナスが何も言わないので、イーディスも口を開ざす。

長い沈黙が、二人の間に横たわる。

それは苦ではなかつたが、イーディスの脳裏に、不意に一つの疑問が浮かび上がつた。それは長い間口にすることができなかつた疑問だ。

「ねえ、ライナス。……、ずっと、聞きたかったことがあるの」

理由は分からぬが、今ならばその疑問も口に出せるような気が

した。

「……、私のために時間を使って、貴方は後悔しなかつた？」

隣に座るライナスが、戸惑うように身体を震わせたことに、イーディスは気付いた。

ライナスが王位継承権をはぐ奪されてから、十年の歳月が流れた。

スタンを引き連れ、ライナスが成人と共に継いだ領地に引っ越してから、十年も経つたのだ。

「貴方はたくさんの中を『えてくれたから、この十年間、私はすごく幸せだったわ。でも、……私は、同じだけのものを、貴方に返してあげられた？」

イーディスは、とても幸せだった。だが、長くは生きられない自分の傍に未来ある彼を縛りつけたことに、ずっと負い田のようなものを感じていた。

ライナスには、イーディスを選ばない幸せだつて在ったはずだ。第五王子の身分を捨てて、王位継承権まで放棄する価値が、イーディスにはあつたのだろうか。

「……、ばかだね。本当に欲しいものを傍に置けた、……後悔なんて、あるわけがない」

彼の手が頬をなせて、次の瞬間、唇に柔らかな感触が伝わる。

「君が与えてくれたすべてが、……僕を幸せにしたよ」

胸を締め付けられるような切なさが襲いかかり、イーディスの頬に一筋の涙が伝う。堪えていた涙と共に、彼への想いが溢れ出して止まらなかつた。

「……、好きよ、ライナス」

彼はイーディスに応えるように、もう一度唇を重ねた。

遠くで聞こえる子どもの笑い声は、まるで子守唄のようだ。彼の瞳が、陽光のようにイーディスを照らす。心は、ひたすらに穏やかであった。

「おやすみ、僕の太陽」

温かな幸福に身を委ねて、イーディスはそつと目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6896v/>

太陽と灰

2011年9月10日03時14分発行